

〈論文〉

## 夏目漱石の中国受容と変貌 異文化理解行為の不平等性の視点を通して

佟 若 瑤

【要旨】明治42(1909)年に発表された夏目漱石の中国旅行紀行文『満韓ところどころ』を、満韓旅行途中での見聞をリアルに記録した『漱石日記』と付き合わせて考察し、異文化体験における観察者と被観察者が不平等な関係に置かれた場合のケース研究として、漱石が旅先の満洲で出会った中国風景に関する描写を取り上げ、中国風景の漱石における受容と変容の実態や、自ら作り上げた中国像に託した漱石の異文化論、自文化論を探ってみる。

【キーワード】理解 誤解 理解の停止

門時代の旧友、南満洲鉄道株式会社(以下「満鉄」と略称)二代目総裁の中村是公の招待を受けて満韓旅行に出た漱石が、是公の招待をもとに満鉄事業視察の旅を始めた。中国にいる間、満鉄および日本の満洲植民地経営に多かれ少なかれ絡み合っている人々と接しながらの過ごし方によって形成された断片的な異文化経験は、異文化「理解」どころか、「誤解」を招くことにもなりかねない。一方、少年時代から漢学を興味深く学び、しかも造詣が深い漱石のなかでは、中国についての準備的知識の系統がすでにしっかりと立っていたのである。それをもって漱石は、是公の満韓視察への期待を巧みに迂回し、当時の日本植民者たちと異なるユニークな目つきで中国を観察した。ところが、このような中国にかかわる知識系統がいったん漱石のなかで定着したら、彼に中国的な美を発見できるセンスを与えているとともに、ある程度の中国に対する先入観も根を下ろしていた。

漱石の中国に対する理解と誤解を究明するには、彼の漢文学的な素養と植民地事業視察と定義された満韓旅行の限界という、内外要因をみていかなければならない。漱石の中国風景に対する解釈には、その内面的要因によって理解を達成した側面を持っている反面、内外要因の共振作用によって偏った見方で曲解した側面も持っているように、彼の中国風

景に対する受容は複雑に展開してきた。このような中国観察と受容の過程で、漱石は始終心身とも異文化の殻に入れないまま、植民者の意志と自分のなかの中国幻像によって架空化された空中楼閣に立ちながら中国に視線を向けた。しかも、その視線の対象になった中国・中国人が気に入るかどうかにかかわらず（そもそもかわれず）に、中国文化に解釈を下しているのである。

このような漱石の中国観察で見られるのは、観察者たる漱石が上位に（たとえ無意識にしても）、被観察者たる中国と中国人は下位に置かれている、異文化理解という行為の不等性である。本章では、異文化体験における観察者と被観察者の不平等な位置に関する住原則也氏<sup>1</sup>の論考をもって、漱石の中国風景への受容に現れた正解と曲解の本質を究明し、その上、異文化を観察・解釈する行為の前提に求められている受容者のあるべき姿勢を示したい。

## 1. 文化の壁を越えた共鳴——発見者と発見される者の合致

そもそも異文化理解という行為は、観察・発見しようとする観察者と被観察・発見される者との分割できない相互関係で成立しているが、両者の関連は異文化理解という行為の発生によって初めてできているのではない。それは、観察者が異文化に入るとき観察される者への先入観を多かれ少なかれ持っていることによって、異文化体験に先立って形成している相互関係である。このような異文化にかかわる先入観の具体的な内容と程度が異文化体験者本人の知識量や人生経験によって多様化されているが、異文化を観察する行為に先行した被観察者に対する認識を持つておくのが常態である。

本論で考察している満洲に入った漱石の中国に対する先入観と言え、彼の少年時代から学び親しんでいる漢文学によって形成された中国像にはかならない。漢文学に反映されている功利的な俗世から超然とした自然観、傑出した知力に満ちた歴史観、悠揚とした人生観などによって、漱石の中で一種の「あるべき」中国像が深く根を下ろしていた。果たして満韓旅行で中国に出た漱石は無意識ながらも現実の中国風景をこの「あるべき」中国像に当てはめながら観察してきた。そのうちに現実と観察者の先入印象とは合致ができることもあれば、勿論ずれが現れることもある。このような漱石の異文化観察に現れた彼の「発見しようとする」風景と「発見される」現実の中国風景の合致点をとらえ、発見者と発見される者の合致によって現れた異文化理解の図式を考察していきたい。

### 1.1 目に映った中国の伝統美

植民地事業視察の使命を与えられた漱石は、中国に到着したとたん、せわしい満鉄事業の見学と調査に追われ、密度の高い毎日を送っていた。こういったきつい旅程は、漱石が大連から旅順を経て、また大連より北に出発すると少し緩和されて余裕ができた。9月14日に大連を出発してハルビンまでの旅において漱石と同行していたのは、是公と満鉄の有力者ではなく、同じ植民地視察で蒙古に出てきた農学者の橋本左五郎であり、二人の最初の目的地は温泉で有名な観光地になる熊岳城である。熊岳城で温泉に入り、河原の澄み切った砂風呂に旅の疲れと胃痛を癒され、漱石の目に水墨画の絵巻がひろがった。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐると緩く折れ曲がってゐる、其向ふ側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を涉つて来た。距離が遠いので小さく動いてゐるが、色丈は判然分る。皆茶褐色ちやかっしょくをして柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりも猶小かつた。凡てが世間で云ふ南画と称するものに髣髴として面白かつた。中にも高い柳が細い葉を悉く枝に収めて、静まり返つてゐる所は、全く支那めいてゐる。遠くから望んでも日本の柳とは趣が違ふ様に思はれる。水は柳の茂る所で見えなくなつて居るが、猶其先を辿つて行くと、忽ち目に打つかる様な大きな山脈がある。巒が鋭く刻まれてゐる所せ い為か、ある部分は雪が積つた程白く映る。其位に周囲はどす黒かつた。漢語には崔嵬さいかいとか巒岈さんがんとか云つて、斯う云ふ山を形容する言葉がたくさんあるが、日本には一つも見当らない<sup>2</sup>。

(『満韓』三十三)

ここで漱石は河原の景色を細やかな描写で表現している。自分の立っている砂地からの眺めを河、岸の周りの木々、村、家畜などを遠近の順で次第に展開させ、単純な「茶褐色」という色どりをもって、中国の伝統的な山水画のようにしとやかな河原の風景を描き出している。その河原からさらに視野を広げると山々が連なっているが、その山の雄大さを表せる日本語の語彙が見つからず、漢語も引用している。漱石は目の前の景色に美術的な審美眼が目覚めたばかりでなく、それと日本の山水でなかなか「見当たらない」漢文学との合致点も見つかり、日中比較的な目つきで中国の独特な風土色を鮮やかに浮かべている。熊岳城の温泉地に立っていた漱石の観察は、ただの一観光客の目つきより遥かに洗練されたものが現れている。それは、漢文学の世界で身につけた美意識と文章力である。現実的な風景が漱石特有の漢文学的な感性に合致して現れた時、その美意識と文学力が覚醒し、目の前の美景に共感を示したのである。このような漱石の漢籍に恵まれた感受力は自然風

景に限らず、見学物の隅々に至っても生かされた。熊岳城の土豪である「韓文」<sup>3</sup>の家を見物するとき、はじめて目にした騾馬という動物をこう描いた。

（前略）長屋門を這入ると鼠色の騾馬が木の株に繋いである。余は此騾馬を見るや否や、三国志を思ひ出した。何だか玄徳の乗った馬に似てゐる。全体騾馬といふのを満州へ来て初めて見たが、腹が太くつて、背が低くつて、<sup>せい</sup>総体が丸く逞しくつて、万事邪気のない様な好い動物である。橋本に騾馬の講義を聞くと、まず騾馬と<sup>けつてい</sup>駄騾の区別から始めるので、真率な頭脳をただ徒に混乱させる許だから、黙つて鞍のない裸姿を眺めてゐた。騾馬は首を伏せて頻りに短い草を食つてゐた<sup>4</sup>。

（『満韓』三十六）

東北大学教授であり、満鉄の依頼に応じて畜産事情の調査を行っている橋本左五郎の目から見れば、騾馬は中国で多く飼育されている交雑種の家畜として研究価値があるに違いない。ところが、植民地視察家の役を徹底的に果たしている橋本と違い、漱石は騾馬の動物学的な特性にいっさい興味を示さなかった。騾馬の品種の違いといった知識より先に頭の中に浮かんできたのは、中国古典名著の『三国志』の中の劉玄徳が乗った馬である。馬と騾馬はそもそも品種が違う家畜であるものの、ここで漱石はわざと両者を混同までして騾馬に文学的な意味を与えているのである。このような漱石の筆で表現されている騾馬は、壮健でおとなしい生物になり、このような生物を制御できるのは、やはり中国古典で描かれた英雄豪傑に限っている。地元の土豪家に飼育されているたった一頭の家畜に文学的価値を与えたのは、漱石が勝手に想像力を生かした結果にすぎない。勝手に想像まで生かした漱石は、騾馬の農学的価値より文学的価値を重んじ、普通の人間の目には農家の仕事に補助的な働きをする家畜にしかすぎない騾馬を異国風物の趣として吟味している。このような観察法をもって、漱石はたった一頭の家畜においても、自分のなかの「あるべき」中国像と現実の中国との合致点を見つけたのである。

## 1.2 耳で捉えた漢文学的風景

漱石はこの熊岳城で二泊したのち、さらに北に向かい、湯崗子温泉に行った。『漱石日記』（以下『日記』と略称）によると、漱石の列車が湯崗子に着いたのは9月17日の夜9時で、「金湯ホテル」という宿屋に泊った<sup>5</sup>。「寂寞たる原野のうちに一点の燈光を認む。是が金湯ホテルである」といったように、当時は寂しい野中の一軒家だったようである。そ

の日の午前に営口市街見物をし、昼間から胃の調子が悪くなったにもかかわらず午後三時頃「倶楽部へ行つて演話を」した<sup>6</sup>。朝から牧場見学に行ってきた橋本左五郎と合流して営口を立ったのは夕方五時過ぎになった。スケジュールがぎっちり詰まった一日に激化してしまった胃痛を抱えながら<sup>7</sup>、湯岡子駅で汽車を降りてホテルまでしばらく歩いていたのだが、漱石は湯岡子の夜景を満喫した。それについて『満韓』において以下のように描かれている。

（前略）すると虫の音が聞こえだした。足元で少しばかり鳴いてる様な家庭的なものではない。虫の音だと云ふ分別が出た時には、其声がもう左右前後に遠く続いてゐた。我々は一つの提灯を先にして、平原にはびこる無尽蔵の虫の音に包まれながら歩いた。

今考へると、中々風流である。筆を執つて書いてゐても、魏叔子<sup>ぎしゅくし</sup>の椎<sup>つい</sup>の伝にあるのが眼の前に浮んでくる。（後略）<sup>8</sup>

（『満韓』四十二）

熊岳城では視覚と想像力で河原の美景、おとなしい家畜の驃馬の姿を楽しんだ漱石は、ここで聴覚で「虫の音に包まれ」た湯岡子の夜景を感受し、再び現実の中国風景と漢文学の接点を見つけた趣を味わっている。漢文学から得た中国印象は単なる漱石の頭の中に深く叩き込まれているのみならず、彼の身体全体、つまり五感にもしみ込んでおり、それは漱石に異文化の美を発見できるセンスを与えたのである。三週間にわたる強行軍のような満洲視察で常に胃カタルに苦しんでいるにもかかわらず、ほんのすれ違った小さな風物まで緻密な目で観察して評価している。漱石はこういう漢文学から得た中国印象に恵まれているセンスを以って、満洲を日本支配下の植民地扱いにした是公のような植民者がもっている上からの視線と、ある科学分野に限られた橋本のような視察家の堅い目つきを超越し、中国の美を理解できたのである。

### 1.3 人文的目線からの発見

漢文学的な自然観と満洲風景との合致に心身的な喜びを味わった漱石は、満洲の名所旧跡など人文的景観も興味深く見ていた。奉天での北陵<sup>9</sup>見物をこう記している。

此所に是丈樹が生えるなら、原の中ももう少し茂つて然るべきであると気が付いた時は既に車の両側塞がつてゐた。（略）

しばらくすると、路が尽きて高い門の下へ出た。門は石を畳んだ三つのアーチから出来上つてゐるが、アーチの下迄行くには大分高い石段を登らなくてはならない。門の左右には大きな龍が壁に彫り込んであつた。(中略) 右は煉瓦の壁である。それが所々が崩れ掛つてゐる。(中略) 其処を廻つて横手の門から車を捨てて這入ると、眼がすつきりと静まつた。一抱もある松ばかりが遥の向迄並んでゐる下を、長方形の石で敷き詰めた間から、短い草が物寂びて生えてゐる。靴の底が石に落ちて一步ごとに鳴つた。一丁許行つて正面に曲ると、左右に石の像がゐた。大きくつて、鷹揚で、しかも石だから甚だ静かである。突き当りにある樓門の様な所へ這入つたら、今度は大きな亀の脊に頌徳碑とくひが立ててあつた。亀も大きかつたが、碑も高い。蒙古と満洲と支那の三国語で文章が刻つてある。後ろへ出ると隆恩門おんもんと云ふのが空に聳えてゐた。積み上たアーチの上を見ると三層あつた。左右に回らしてある壁も尋常ではない。あの上を歩いて見たいと番頭に頼むと、ええ今乗つて見ませうと云つて中へ這入つた。(後略)<sup>10</sup>

(『満韓』五十)

木が茂っているところから、北陵は町からかなり離れて人跡まれな野原にあることがわかつてゐる。しかも、200年以上の歴史がある旧跡なので、あちこち「崩れ掛つてゐる」ところもある。このようなひび割れた垣になった北陵は、空に聳えている高い門、龍が彫刻されている壁、しめやかな松の列、泰然とした石像・石碑などといった漱石の緻密な筆によって、頑丈にしかも静粛に表現されている。彼の目に映ったこの清朝皇室陵墓の崩れた壁は、『史記』や『十八史略』などの史書で読んだ中国の土地で交替してきた歴代王朝の栄枯盛衰の縮図的な投影になっていたのである。

『日記』によるとこの北陵見物は9月20日のことである。そして、北陵を見学した後、「午後二時より宮殿<sup>11</sup> 拝観」し、「次に芝居を看」た。「芝居」は「左右に入相出将とかいて中央に錦欄の幕を張る」というところから中国の伝統芝居の類だと推測できる。この日の日記の内容からみれば、今までの満洲旅行日記に記されている密度の高い見学経験と違い、廟びょうと宮殿の見学に芝居鑑賞といったようにずいぶん余裕ある日程と対照的に、見学の見聞は文字・数字・簡単な図形を用いて詳しく記録されている。満鉄経営或いは関連企業のさまざまな近代色濃く、日本国内ではまだ造れない新しく先進的な施設より、漱石は満洲の伝統文化にもっと大きな関心を示したのである。この関心は、中国に存在した最後の王朝——清王朝の皇室にだけ集中したわけではなく、ごく日常的な庶民生活にも及んでいる。

大連で股野義郎の案内で中国の宿屋を見ようとして、「路の左側にある戸を開けて中へ這入つ<sup>12</sup>」てみたら、普通の意味での宿屋ではなく、大連で中国人と組んで豆の商売を経営する「谷村君」の家の奥座を改造した、豆の商人たちが取引に大連に出てくるとき利用する宿屋である。ここで漱石ははじめて「<sup>マージャン</sup>麻将」を見た。

二階が荷主の室だと云ふんで、二階へ上つて見ると、成程室が沢山並んでゐる。そのうちの一つでは、四人で博奕を打てゐた。博奕の道具は頗る雅なるものであつた。厚みも大きさも将棋の飛車角位に当る札を五六十枚程四人で分て、それを色々に並べかへて勝負を決してゐた。其札は磨いた竹と薄い象牙とを脊中合せに接いだもので、其象牙の方には色々の模様が彫刻してあつた。この模様の揃つた札を何枚か並て出すと勝になる様にも思はれたが、要するに、竹と象牙がばちばち触れて鳴る許りで、何処が博奕なんだか、実は一向わからなかつた。ただ此象牙と竹を接ぎ合はした札を二三枚貰つて来たかつた<sup>13</sup>。

（『満韓』十九）

『満韓』の中で描いている「<sup>マージャン</sup>麻将」は現在世界中の人々に親しまれるテーブルゲームになっており、それが日本に伝わってくる時間<sup>14</sup>からみれば、漱石は近代日本における「麻将」を受容した最初の一人であろう。日本国内で見たことがない「博奕の道具」に興味をそそられ、中国の庶民的な遊びの風雅さを敏感に感じ取ったのである。ただし、漱石が大連に滞在している三日間<sup>15</sup>は、満鉄事業見学のきついスケジュールに追われる日々なので、どんなに興味をそそられても「麻将」をやっている連中のなかに入って詳しく話を聞く余裕がないのである。結局、この中国の伝統的な庶民遊樂を、牌のぶつかり合う音を耳にただけで受容した。基本的なルールも分からないまま「麻将」の場を去る時の、牌をもらいたかつたという漱石の心情で察せられるのは、彼がこの異文化と身近に接近できる現場に残している未練である。満鉄視察家の名目を被らされ、仲間にも囲まれている満韓旅行では、異文化に直面できる現場に身を置くのがあまりにも少ないからこそ、漱石は特別に深い興味を示していたのである。

#### 1.4 味覚で満喫した「中国味」

旅行中、胃病に毎日のように苦しんでいた漱石は、旅順で戦地の見学を終わって立つ前に、民政署長官白仁の邸宅で朝食に地元の鶏料理をご馳走してもらった。『満韓』においてこれはたった一回しかない中国料理の経験の記録として残されているのである。そこか

ら読み取れるのは相変わらず漱石の異文化に直面した興味深さである。

まづ御椀の蓋を取ると、鶉がある。所謂鶉の御椀だから不思議もなく食べて仕舞った。皿の上にもあるが、是はたし髓か醤油で焼かれた様だ。是も旨く食た。第三は何でも芋か何かと一所に煮られた様に記憶してゐる。然し遺憾ながら、はつきり判然とその味を覚えてゐない。是等を漸次に平げると、佐藤はまだあるよと云つて、次の皿を取り寄せた。それも無論鶉には相違なかつた。けれども只西洋流の油揚げにしてある許で、ややとすると前の附焼やきと紛れ易かつた。しかもこの紛れ易い油揚げは充分仕込んで有つたと見えて、まだ喰ひ切らないさきに御代りが出て来た。

斯の如く鶉が豊富であつたため、つい食べ過ぎた。余の胃の中に這入つた骨丈の分量でも随分ある。(後略)<sup>16</sup> (『満韓』三十)

満洲に出発する直前に激しい胃カタルにかかり、それは満韓旅行の途中で悪化する一方で、毎日の胃痛、胃の膨満、吐き気やオクビなどから食事に気が進むどころか、もっとも日常的な食事に多大な苦難を嘗めていたことは、『満韓』においても満韓旅行日記においてもところどころに散在して記録されている。『満韓』における食事にかかわった記録では、たった一度だけ食べ物について詳しくしかも平気に描いたのはこの旅順の鶉料理である。ここで「これも旨く食た」「ついに食べ過ぎた」という表現は特に立ち、「手を分つ古き都や鶉鳴く<sup>17</sup>」という句も作っているところから、この旅順の名物料理はどれほど漱石を喜ばせているかとわかるだろう。

ここまで述べてきたように、温泉地で満喫した南画風の自然風景、おとなしい動物の驛馬、清王朝の繁栄を記録した名所旧跡などといった『満韓』における中国風景への賛美は、いずれも漱石の漢学教養によって展開されている。漱石は漢文学の素養によって与えられた中国像をもって満洲で出合った風物を見ていた。この意味で、彼の満洲旅行は、漢文学の世界で描かれた中国像を現実の中国で探求する旅だといってもいい。漢文学的な中国風景を発見しようとするこの旅で、漱石は近代日本の満洲における植民地事業より地元の固有風物にいつそう大きな好奇心と注目を払った。そうして、満洲の自然、中国特有の家畜、歴史的な旧跡から自分の発見しようとする風景に合致した風物が果たして見つかり、今まで漱石の想像に浮かんでいた幻像的な中国風景は、発見される者の異文化の現場で現実化された。異文化観察者の発見しようとする行為と観察される者である異文化で発見された風物との合致点が現れたとき、漱石は異質の文化風物に対しても、文化の違いを越えた心情的な共鳴を体験して理解を示した。そればかりでなく、漢文学に育った価値観と中国文

化に対する独自の理解をもって、自文化で体験できない中国料理の美味しさと、満洲に長く滞在している植民地支配者たちの自己優位的な目線では発見できない庶民生活にある風雅な趣を、漱石は敏感に感じて楽しむこともできた。このようにして、漱石の中国への先入観である漢文学的な中国認識は、満洲の旅において漱石の異文化理解に助力してきたのである。

前述のように、最初から植民地事業視察・宣伝のテーマを抱えて満洲を旅した漱石の中国理解には大きな障碍があった。それは、空間的に中国の土地まで移動したにもかかわらず、正真正銘の中国文化を見せてもらえず、なかなか日本人としての「日常」から脱出できないままで、異文化の中核にアプローチすることが大きな壁に突き当たったことである。この壁を乗り越えるためには、植民地視察家の身分に与えられた植民的・自己満足的な目線を排除し、中国文化の独立性に対する認識が必要である。満洲に出た漱石は少年時代の漢学勉強で積み重なっているノウハウ、つまり中国伝統文化に対する造詣が高いという理解をもって、断片的に目に入った中国風景から日本と違い、日本にはない魅力を発見している。また、漢籍古典の風景を探索する漱石の満洲視察の視線は満鉄視察・宣伝というテーマから逸れて、ほかの植民地統治者の自負的な文化論を捨て、中国文化に強い好奇心を示している。これによって漱石は漢文学から飛び出し、現実の異文化現場に存在する中国的な美を体得できたのである。

ところが、冒頭に述べているように、漱石の満洲旅行に先だった中国認識は、結局一種の異文化に対する先入観であり、漱石が勝手にしかも執拗に「あるべき」だと思い込んでいる中国印象である。このような印象的な異文化認識と異文化の実際とは一致したところができるとともに、背馳も現れている。合致点が見つかったとき受容者が異文化に大きな理解を示したうえにサプライズ的な新発見もできているものの、ずれが現れたときの受容者に対するショックもはなはだしい。漢文学的な中国風景に優れた理解力を示した漱石が、このようなずれに直面したとき現れた姿勢について次節で考察する。

## 2. 見られたくない裏事情に面して——カルチャーショックによる不快感とその伝達

異文化理解という行為は、異文化の受容者の観察・発見しようとする立場をともっており、観察・発見しようとする観察者と被観察・発見される者との分割できない相互関係で成立している。この相互関係における両者関係は平等というより、観察者が上位あるいは優位に、観察される者が下位に置かれる。それは、観察される者は外に見せたい自分とともに、見られたくない自分という両面性を持っているにもかかわらず、観察者の発見し

ようとする行為には、相手の見せてくれる側面ばかりでなく、見られたくない側面の両方とも観察・発見しなければならないこともあるのである。漢文学から得た中国像を持ちながら中国旅行に出た漱石は、満洲の美しい山水、歴史ある旧跡、庶民生活の優雅な趣などといった異文化の見せてくれた理想的な中国風景だけではなく、近代中国の、外に見られたくない裏事情にも直面してしまった。

## 2.1 「汚い」中国像

漱石が訪れていった明治 42 (1909) 年の中国は、アヘン戦争をはじめ、日清戦争、国連軍の北京出兵、日露戦争、そして国内の太平天国と義和団の戦乱、戊戌の政変の失敗などを経て、植民地・半植民地化がますます深刻になり、かつて美しかった国土の多くは戦争によって廃墟になったり、侵略者の植民地・半植民地になったりし、人々は安心して生活することもできなくなる実像である。漱石は満洲で当時の中国の沈淪像をたくさん目にした。

漱石は、9月6日大連埠頭に着いたとき、最初に目に入った風景をこう書いた。

船が飯田<sup>がし</sup>河岸の様な石垣へ横にびたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれども其大分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊ると更に不体裁である<sup>18</sup>。

(『満韓』四)

ことに馬車に至つては、其昔日露戦争の当時、露助が大連を引上る際に、此儘日本人に引渡すのは残念だと云ふので、ご叮嚀に穴を掘つて、土の中に埋めて行つたのを、チャンが土の臭を嗅いで歩いて、とうとう嗅ぎあてて、一つ掘つては鳴動させ、二つ掘つては鳴動させ、とうとう大連を縦横十文字に鳴動させる迄に掘り尽したと云ふ評判のある、——評判だから、本当の事は分らないが、此評判があらゆる評判のうちで尤も巧妙なものと、誰しも認めざるを得ない程の泥だらけの馬車である<sup>19</sup>。

(『満韓』四)

中国労働者の「クーリー」たちを汚く描いた上に、「チャン」という中国人に対する呼び方を用いた点で、この大連埠頭で最初に目に映った満洲風景に対する描写は、漱石の中国・中国人に対する差別意識の有無をめぐる論考で例外なく取り上げられる急所だとされているが、本論ではひとまず漱石を異文化に遭遇した一人のごく普通の人間として取り扱

い、そこに起こり得る現象を考察してみたい。

大連埠頭は「海とは思えなく」<sup>かし</sup>「河岸」のようで、そこで騒がしく鳴動しているクーリーの群れとこのクーリーの団体に御されている人力車、馬車のいずれも「内地のに比べるとはなはだ景気が好くない」と漱石は思った。「内地」とはむろん日本のことを指し、漱石は自分の外国での見聞を日本と比較しながら見ていることが分かったが、その比較の基準――漱石の基準は問題である。

ここで漱石の基準としてまず挙げられるのは前述した中国に対する先入印象である。今まで漱石の中国理解にあるのは彼の漢文学から得た「支那趣味」で、むしろ漢籍の紙面上に浮かんでいる中国風景への憧れだと言える。その蜃気楼のような中国幻像にあてはめられる風景は、熊岳城の豊かな自然に囲まれた温泉地、1600年ほど前の英雄とともに中国の大地で活躍した逞しい馬のような家畜、中国の長い歴史を刻まれている静肅な皇室陵墓、市街の隅々で見かけられる中国人の風雅な遊樂といったものであり、いずれも大連埠頭で直撃した貧乏くさくて汚い風景とは雲泥の差あるものである。この理想と現実の甚だしいギャップに、異文化に足を踏み入れたばかりの漱石は、理想像の破滅に大きなショックを受けたのである。

次に挙げられるのは漱石が日本人として持っている近代科学的な衛生観である。日本は明治維新以降、近代化の道を歩みだし、富国強兵、殖産興業、文明開化の政策を推進していく中で、近代的な衛生観も移入されてきた。明治21(1888)年に配布された「衛生かぞえ歌」に、「身にまく着物は折々に洗うてのり気のあるように<sup>20)</sup>」「いつも内外掃除して<sup>22)</sup>」「安いたきぎで湯を沸かし必ず生水飲まぬよう<sup>21)</sup>」などとあったように、衛生意識は日本人の衣食住全般に及んでいた。しかも一国の衛生状況はその国の文明度を測る尺度になり、近代科学的な衛生意識はそのまま文明国家としての自負につながっているという考え方も日本国内では定着した。そのような事情は次の福沢諭吉の言葉からも窺い知ることができる。

日本の文明開化<sup>しんしん</sup>駭々乎として進歩する其中に就て、医学の進み方は最も著しき<sup>また</sup>又その中でも、近來は別して衛生論が喧しくなりて、衛生学者の注意尽力、中々以て容易ならず、或は之を筆にし、或は口にして至り尽くさざるはなし。(中略)深切<sup>しんせつ</sup>の細にして道理の尤もなるは、吾々が日本人民として自ら之を悦ぶのみならず、外国人どもに対しても聊<sup>いささ</sup>か鼻を高ふするほどの次第なる……(後略)<sup>23)</sup>

大連埠頭で遭遇したクーリーと馬車を明治以来の日本人の衛生観で見たら、あまりにも

異質的な風物なので、漱石に強い違和感が生じた。そもそもこういう文化摩擦を原因に生じた違和感は解消し得ないわけでもないが、その解消には異文化に出た本人のその国の文化に対する「違い」を前提とした理解<sup>24</sup>が必要である。その「違い」への認識を達成するためには、前述したように自ら異文化に入って自文化における「日常」とまったく違った新しい環境について学んで慣れるという、異文化を受容する過程は欠かせないのである。ところが、漱石の不完全な満洲体験では、地元の社会システムに入って、地元の人々の生活様式などを見る機会すら少なく、異文化に心身全体で接近して学べる環境に恵まれていなかったのである。したがって、大連埠頭で直面した「汚い」中国風景に対して、漱石は単なる直感で受け止められるしかなく、そこから生じた「汚い」中国像はとうとう漱石の満洲の始終を貫き、『満韓』で「如何にも汚い国民である<sup>25</sup>」中国人像を描き出してしまったのである。

## 2.2 「残酷」な国民像

漱石はこうして漢文学的な中国幻像と近代日本人としての一般常識をもち、植民地視察のテーマに規定された満洲の旅を歩いてきた。現実の中国で出会った理解しがたい風物について、地元の当事者に聞いたりする余裕もない旅で、漱石はこれらの風物に大きなカルチャーショックを抱え、『満韓』において自分の経験とその時の心情を写生的に描いた。このような漱石の筆によって汚い中国像に引き続いて残酷な中国像も紙面に浮かんできた。

満洲で自分にさんざん苦しい思いをさせた交通機関のことを、漱石は『満韓』で容赦なく咎めているのである。熊岳城のトロ<sup>26</sup>は「乗つてる人の臓器は少からず振盪する<sup>27</sup>」のみならず、中国人の車夫の「汗臭い色<sup>いろ</sup>のが脊広の裾に触るので気味が悪い事がある<sup>28</sup>」。また、奉天駅に送迎に来た宿屋の馬車について、さらに以下のように書いている。

矢張り泥の中から掘り出して、炎天で乾かした様に色が変わつてゐる。荷物と人間をぐるに乘せて、構内を離れるや否や、御者が凄じく鞭を鳴らした。峠を越す田舎の乗合馬車よりも手荒な取扱方である。広い通りはそれ程でもないが、次第に城内に近づくに従つて、今迄野原同然に茫々としてゐた往来が、左右の店の立込んで来ると共に狭くなる上に、鉄道馬車が其真中を駆けつつあるにも拘らず、烈しい鞭の影は一分に一度位は頭の上でひらめいた。馬は無理にも急がなければならない。けれども奉天丈あつて、往来の人は馬車の右にも左にも、前にも後ろにも、のべつに動いてゐる。其処へ驟馬を六頭も着けた荷車がくるのだから、牛を駆る様にのろく歩いたつて危ない。

それなのに無人の境を行くが如くに飛ばして見せる。

我々の様な平和を喜ぶ輩は此車に乗つてゐるのが既に苦痛である。御者は無論チャンチャンで、油に埃の食ひ込んだ辮髪を振り立てながら、時々満洲の声を出す。余は八の字を寄せて、馬の尻をすかしつつ眺めた。さうして、みだりに鞭を瘡せ骨に加へて、旅客の御機嫌を取るのは、女房を叱つて佳賓をもてなすの類だと思つた<sup>29</sup>。

(『満韓』四十五)

ここで、トロの車夫も馬車の御者も漱石の目に不衛生で、しかも乗り物扱いも乗客扱いも残酷なように映っている。車夫の汚い服はこの業種の作業服であり、御者の「辮髪」も当時の清国人のありふれた格好であるが、乗り物の不都合に戸惑わされた漱石にとっては不潔で癢に障った風物になってしまった。痩せた馬に鞭を加えることも、もともと単なる御者が馬車にスピードを出す術であるが、馬車のなかでさんざん揺れられた漱石は、それを御者が乗客の機嫌を取るために故意に演じた下手なパフォーマンスに描いた。こうして、漱石は自分を大いに戸惑わせた異文化風物に対する反発を辛辣な言葉遣いをもって強烈に示したのである。

漱石の書いている「残酷な支那人」の残酷さは、乗り物と外国人の乗客に対する扱い方に限らず、中国人自身にも及ぼしている。奉天城内で馬車に引かれて負傷した老爺と老爺の傷を黙って眺めている群衆に漱石が出会った。

現に北陵から帰りがけに、宿近く乗付けると、左側に人が黒山の様にたかつてゐる。その辺は支那豆腐やら、肉饅頭やら、豆素麵などを売る汚ない店の隙間なく並んでゐる所であつたが、黒い頭の塊まつた下を覗くと、六十許の爺さんが大地に腰を据ゑて、両脛を折つたなり 前の方へ出してゐた。其右の膝と足の甲の間を二寸程、強い力で剥り抜いた様に、脛の肉が骨の上を滑つて、下の方迄行つて、一所に縮れ上つてゐる。丸で柘榴を潰して叩き付けた風に見えた。(中略) 不思議な事に、黒くなつて集つた支那人はいづれも口も聞かずに老人の傷を眺めてゐる。動きもしないから至つて静かなものである。猶感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、傷口をみんなの前に曝してゐる老人の顔に、何等の表情もないことであつた。痛みも刻まれてゐない。苦しみも現れてゐない。と云つて、別に平然ともしてゐない。気が付いたのは、ただ其眼である。老人は曇りどんと地面の上を見てゐた<sup>30</sup>。

(『満韓』四十五)

百年前の中国のある町の隅で起こった交通事故の真実を再現することは、百年後の現在ではとうてい無理になってしまったが、その現場にいた漱石は自覚していない大きな問題を抱えた。それは中国語会話に通じなくて通訳を通さなければ自分の目の前で何が起きているのか見当もつかない漱石が、いくら中国の土地を見学しても自由に中国人と接触することができないことである。漢文学の世界を飛び出し、本物の中国の奥地に立脚点を置きながらの中国理解の可能性は、漱石の満洲旅行の最初から満鉄視察家の身分と彼自身の異文化を生きる術の未熟さによって阻害されているのである。このような阻害を乗り越えなければ、漱石にできることは、目の前に現れている景色とその異色の景色を目にしたことで受けた衝撃をありのままに記して、日本人の読者に伝えるしかない。そのため、さすが漱石は「チャンチャン」という表現を用いた。

「チャン」とは、今までの『満韓』についての多数の論考に述べられているとおり、当時の日本人が中国人を対象にして採用した呼び方である。こういう日本国内において一般的に使っている外国人に対する呼び方が生まれたのは、勿論当時の時代状況にもかかわっている。時代的な背景と言え、近代以来の日中関係に関する事情がまず取り上げられやすく、このような言葉も互いに戦って嫌がっている異民族の間の偏見を含む表現になってしまう。ところが、ここで「チャン」という言葉自身にもっと注目すれば、もうひとつの大きな時代背景が浮かんでくる。それは近代化による西洋言語の東洋への伝来である。近代まで王朝の名称で呼ばれた中国は、英語の伝来によって東洋世界においても「china」で呼ばれ、中国人は「chinese」で呼ばれることが珍しくなくなってきた。「チャン」というカタカナ表記はもともと日本語にない外来語だと推定できるし、また、「チャン」のローマ字表記「chan」と英語表記の「chinese」を比べてみれば、二つの言葉の発音が似ているところがあることに気づくこともできる。こうして「チャン」という言葉を言語学的性質から考察すると、英語世界における中国人に対する呼び方を簡化し、日本語において変容した結果として「チャンチャン」と呼び出されたことが分かった。英語から変容してきたこの言葉は、当時の日本において中国人を表示する一般用語になっていたのである。この一般用語を使い慣れている日本人の読者群を想定した以上、満洲で遭遇した異質な景色とそれを受容した漱石の心境を伝えるためには「チャン」以上に表現力のある言葉はなからう。

『満韓』において、大連埠頭で見た喧騒でしかも不潔なクーリーと奉天（現中国遼寧省瀋陽市）の馬車の中国人御者に対する描写に二回「チャン」が使われている。勿論二回とも漱石の不愉快を伴った経験であり、「チャン」という表現から確かに漱石の強い反発と辛辣な揶揄を読み取れる。ただし、このような漱石の反発と揶揄を中国と中国人に対する

植民主義的な偏見と蔑視だとするのは、やはりそこにある漱石の感情を悪意的に誇張しすぎた解釈になると思う。国家意志からかぶされた植民地視察家の身分を迂回して文化論的な目線で中国を観察し、自分の懂れている漢文学的な中国風景に共感的な理解を示した漱石は、容易に植民主義に左右されるわけではない。漱石の反発と揶揄は、煎じ詰めれば、ここまで論じているように、彼が持っている理想的な中国像、一日本人としての科学的常識、個人的な美意識が転覆される異文化の現場で受けた衝撃の正直な伝達である。

中国で遭遇した文化的な衝撃に生じた強い違和感とショックは、上述した漱石自身の先入観念と満韓旅行の限界といった内外二重要因の作用の結果であり、『満韓』の記録に反映されている漱石の認識も中国の文化現象に対する正解とは言えず、一種の異文化への誤解である。しかし、このような漱石の誤解を含んだ伝達は、かえってわりと当時の中国社会の実像をリアルに記録している。今日、中国人のわれわれがこの近代中国紀行を振り返って読むとき、自分たちが揶揄された事情に感情的に反発するより、そう言われた理由をきちんと考え直さなければいけない。また、逆にわれわれが異文化に接するとき、相手を勝手に自分の先入観と価値観に当てはめず、自ら異文化に身を置いて、いつもとは違った経験——その場所で外国の言葉を話したり風俗習慣を身につけようとしたりしながら、異文化の中で自文化を感じ、自文化をあらためて認識する——という異文化トレーニングの経験を重ねることをもって、自他文化を相対視したうえで、他者に対する理解へ一歩前進することを図る姿勢が大事だと思っている。

### 3. 異質的な風物に対する理解の停止

漢文学の素養から得た中国文化に対する敏感な感受性を備えた漱石は、満韓旅行を同行した植民地視察家と満洲に長く滞在している植民経営者としての日本人たちと違い、満洲の自然風景や名所旧跡などに宿っている中国的な価値観の多くに共感的理解を示しているとともに、漢文学の素養から得た知識でも日本的・個人的な価値観でも解釈できない中国社会の実態に対して激しい反発も示している。漱石は中国の社会生活の様々な側面で異文化の壁を感じていたが、仲間グループが伴う旅なので、異文化の衝撃で生じた疑惑について地元の人間と一言も交わすこともできずに、そのまま抱えながら『満韓』を執筆したわけであり、漱石の疑惑も未解決のまま記録されている。本節では、『満韓』に記されている漱石の満洲に残っている当惑を取り上げ、その要因を探ろうとしている。

上述で取り上げた漱石が初めて「麻將」に惹かれた場所、地元の中国人と豆商売を営する「谷村君」の奥座敷で改造された豆の荷主たちが泊まる「宿屋」で、漱石は書の鑑賞

をした。

室の中には妙な書が麗々と壁に貼り付けてある。いづれも下手いものなのに、何々先生の為に何々書すと云つた様に勿体振つたの許であつた。股野が何か云ふと、向ふの支那人も何か云ふ。しかし両方の云ふ事は両方へ通じない様である<sup>31</sup>。

(『満韓』十九)

豆商売をしている人たちを相手にする「宿屋」なので、そこに出入りしているのはほぼ豆商人に決まっている。利益を目指して集まった人たちが、年月を重ねる商売のやりとりでお互いに知り合い、厚い友情で結ばれる例も決して珍しくない。人情的な昔の中国のビジネス世界の一つのあらわれとして、仲がよくて信頼できる取引先の人間に自ら書いた書を送ることがある。ただ、商人として普段取っている「書く」という行為はせいぜい帳簿をつけるのに限っているので、身を修めるための格調高い趣味と専門にしている知識人の「書く」とは比べ物にもならない。文学者の漱石からみれば、商人たちが自分をいかにも教養のあるように見せかけるために、わざとできもしない書に手を出したりすることは「いづれも下手」と言ってもしょうがないが、その紙の裏に隠れる金銭を超越した温情に富んでいる昔中国のビジネス人の姿を見逃したのは、残念だとは言わざるを得ない。

同じ中国的な人情で起こった戸惑いは、熊岳城の梨畑でもみられた。熊岳城で漱石と橋本左五郎、通訳の「大重君」と一緒に梨畑を見て、梨の試食もした。梨畑を去るところ、橋本は梨を買おうとするときのことが『満韓』で次のように記してある。

梨にも喰ひ飽きた頃、橋本が通訳の大重君に、色々御世話になつて有難いから、御礼のため梨を三十銭程買つて帰りたいと云ふ様な事を話して呉れと頼んでゐる。それを大重君が頗る厳肅な顔で支那語に訳してゐると、主人は途中で笑ひ出した。三十銭位なら上げるから持つて御帰りなさいと云ふんださうである。橋本はぢや貰つて行かうとも云はず、又三十銭を三十円に改めやうともしなかつた。(後略)<sup>32</sup>

(『満韓』三十五)

大連の豆商人「宿屋」にいるとき両方とも言葉が通じない事情と違って、通訳の「大重君」は真面目に梨を買おうとしている橋本左五郎の意思を中国側の梨畑主人に伝えたはずなのに、途中で主人に笑われ、梨をただでもらえることになってしまった。満洲であった現在の中国東北部とは、昔から黒々とした肥えた土地に恵まれ、農産物の出来がよい地域であ

る。広々とした黒土地で育てられた人間たちは気前がよくて余裕綽々たる性質をもっている。況して「案内の話では二千万とか二億万とかの財産家ださう<sup>33</sup>」で、百万長者の梨畑主人のことだから、「三十銭位」の梨までお金を払ってもらうことこそ気まづがっているに違いない。ところが、このように一日間「色々お世話になつて」いる上に、お礼もできずにただで梨をもらってしまうと、日本的な常識からあまりに外れることにもなる。文化の違いで起こった常識的でない状況を前にして、いかに農科学分野での物知りである橋本も決断がつかないままであり、いくら漱石でもその場では口を出す余裕を持たなかったのである。

また、前出した営口の売春町で客へのもてなしとする曲の練習をしている団体に遭遇した漱石は、その曲の異様さに同じような消化不良を抱えていた。

余は二歩ばかり洋卓<sup>テーブル</sup>を遠退いて、次の室の入口を覗いて見た。さうして又驚いた。向の壁に倚添へて一脚の机を置いて、其右に一人の男が腰を掛けてゐる。其前には十二三の少女が男の方を向いて立てゐる。少し離れて室の入口には盲目<sup>めくら</sup>が床几<sup>しょうぎ</sup>に腰を掛けてゐる。調子の高い胡弓と歌の声は此一団から出るのである。歌の意味も節も分らない余の耳には此音楽が一種異様に凄じい響を伝へた。(中略) 蒼黒く土気付た色を、一心不乱に少女の頭の上に乗しかける様に翳<sup>かざ</sup>して、腸<sup>はらわた</sup>を絞る程恐ろしい声を出す。少女は又瞬きもせず、此男の方を見詰めて、細い咽喉<sup>みい</sup>を合してゐる。それが怖い魔物に魅入られて身動きの出来ない様子としか受取れない。盲目は彼の眼の暗い如く、暗い顔をして、悲しい陰気な、しかも高い調子の胡弓<sup>す</sup>を擦り続けに擦つてゐる。左りの方に立つてゐる女の一人が余を見た。それが忌むべき藪<sup>やぶ</sup>睨<sup>にら</sup>みであつた。日の目の乏しくつて暮易い室のうちで、此怪しい団体は此怪しい音楽を奏して夢中である。余は案内の袖を引いてすぐ外へ出た<sup>34</sup>。

(『満韓』三十九)

ここで描かれている遊廓で女を買いに来る客を招待するための音楽は、世間のいわゆる低俗なもので、漱石の正統な中国經典を中心にする中国観の体系とは、倫理的にも審美的にも大きな溝がみられる。いかにも「支那趣味」を備えていながら、満洲に出たにもかかわらず、その場で一本調子の発想で「怪しい音楽」という解釈をくだしてしまった。

ところが、文化というのは、書籍の中の動きも直しもできない文字のような凍結された状態で続いているような存在ではなく、急速にしかも限りなく変化していくのである。それによって、異文化理解というものにも絶対的最終的な解釈はなく、常に違った解釈があ

りうるし、より深いレベルの解釈もありうる。漢文学的な質素は漱石に中国の美を発見できるセンスを与えるとともに、彼を一種の不変不易の中国風景の殻に閉じこもらせるときもあり、現実の中国を前にすると、固定知識を超えた異文化の風景への対応に首をかしげさせていたのである。

漱石のような、「支那趣味」という異文化への興味をもち、最初から植民地事業経営を視察する役目から逃げ、自ら中国への理解を進めようと努力している人間でも、ある一定の異文化像が成立すれば、異色的な物事に会おうと理解しようとする努力の停止が起こりうる。その努力を再開するためには、異文化がどんな形で現れてもそれを理解しようとする意識の持続が必要であり、異文化への理解はゴールとする頂点があるというものではなく、際限なく続くプロセスとして扱って絶えず学習していくのが、基本的に重要な姿勢だと思われる。

## 注

- 1 住原則也氏の論考は、住原則也、箭内匡、芹澤知広、『異文化の学び方・描き方』（世界思想社、2001年12月10日）において見られている。本章の論理展開の手がかりになっているのは、本書の第2章「異文化理解に求められる姿勢と視点」25～47頁である。
- 2 『漱石全集』、第十二巻「小品」307～308頁、岩波書店、1994年12月20日。
- 3 『漱石日記』（以下『日記』と略称）の注釈によれば、「韓文」は「咸文」の誤記と思われる。咸文は熊岳城の土豪で、黄旗山一帯を所有していた。『漱石全集』、第二十巻「日記・断片下」、110頁日記および注解595頁参照、岩波書店、1996年7月5日。
- 4 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」314～315頁。
- 5 前出『漱石全集』、第二十巻「日記・断片 下」112頁。
- 6 9月17日『日記』による。「倶楽部」は営口倶楽部であり、会長は日本領事館の領事太田喜平である。演題は『趣味に就て』で、その講演の内容が明治42年9月21日付の『満州日報』に掲載された。前出「漱石全集」、第二十巻「日記・断片 下」112頁。
- 7 『満韓』第四十二節で、営口から湯崗子へ向かう途中で胃痛がひどくなる経緯を記している。「飯の菜に奴豆腐<sup>やっこどうふ</sup>を一丁食った所が、其豆腐が腹へ這入るや否や急に石灰<sup>あしばい</sup>の塊に変化して、胃の中を塞い<sup>いざな</sup>でゐる様な心持である。腮の奥から締め付けられて、已を得ない性質<sup>せいかく</sup>の唾液が流れ出す。それに誘はれる儘にして置くと、嘔きたくなる。せめて口中の折合でもと思つて、少し抵抗しに掛かると、足が竦<sup>すく</sup>んで動けなくなる。」ということである。前出『漱石全集』、第十二巻「小品」328～329頁。
- 8 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」328頁。
- 9 北陵隆業山と称し、奉天城の北約4キロメートルの高地にある昭陵のこと。清朝第二代の太宗文皇帝ホンタイジ（Hong Taigi, 1592-1643. 在位1626-43）と皇后の陵。太祖皇帝（注23参照）の陵を東陵と呼称するのに対していう。清朝式の墓廟の代表的なものとして知られている。
- 10 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」347～348頁。

- 11 清の太祖ヌルハチ (Nurhaci, 1559–1626, 在位1616–26) が宮居としていた奉天宮殿のこと。
- 12 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」270頁。
- 13 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」271～272頁。
- 14 漱石が『満韓』における麻雀に対する記録は、日本に麻雀を紹介した最初の記として有名になっている。この漱石の紹介と同年に日本上陸第1号の麻雀牌をもたらしたのは日本語と英語の教師として中国四川省に赴任していた名川彦作という人物である。その後、日本国内で麻雀が広く知られてブームになったのは、関東大震災の翌年、大正13 (1924) 年からである。麻雀博物館編、野口恭一監修、『麻雀の歴史と文化——麻雀博物館図録』、竹書房、2005年9月20日。
- 15 『日記』によると、漱石が9月6日に大連に着き、7日～9日まで大連で過ごし、10日の朝8時半の列車に乗って旅順に向かったのである。前出『漱石全集』、第二十巻「日記・断片 下」、100～103頁参照。
- 16 『漱石全集』、第十二巻「小品」299～300頁。
- 17 『満韓』の三十節によると、漱石が旅順で旧友の佐藤友熊と別れるとき、佐藤に俳句を書き求められ、この句を作ったのである。前出『漱石全集』、第十二巻「小品」300頁。
- 18 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」234頁。
- 19 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」235頁。
- 20 小野芳朗、『〈清潔〉の近代』121頁、講談社、1997年3月10日。
- 21 同注19。
- 22 同注19。
- 23 福沢諭吉、『衛生論』、明治二〇年八月五日付、『時事新報』漫言。
- 24 大西守編、『カルチャーショック』198頁、同朋舎、1988年9月15日。
- 25 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」340頁。
- 26 人力トロッコのことで、軌道上の台を車夫が勢いよく押しながら走って飛び乗り、速度が落ちると車夫は再び降りて押し走るように走らせる。
- 27 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」304頁。
- 28 同注27。
- 29 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」335～336頁。
- 30 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」336～337頁。
- 31 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」272頁。
- 32 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」313頁。
- 33 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」312頁。
- 34 前出『漱石全集』、第十二巻「小品」322頁。